

トラブル症例から学ぶ、インプラント外科の落とし穴

～ 都市伝説にだまされるな ～

医療法人社団野阪口腔外科クリニック・理事長
野阪 泰弘

抄録

骨結合型インプラントは、補綴治療の選択肢として普及し、インプラントシステムの様々な改良によって高い成功率が得られています。しかし、インプラント治療は、清潔域と不潔域を異物が貫通して存在する特殊な医療で、終診は無いという特徴があります。したがって、数十年以上に渡ってインプラント体周囲に健康な硬軟組織を存在させることが重要で、短期的な成功例には全く意味がないと思われま

す。近年、インプラント関連手術の簡素化や治療期間の短縮を目的として、様々な術式や骨補填材が報告されています。また、学会、講演会および論文では、最先端の術式による成功例が発表され、自慢大会のオンパレードになっていると思われま

す。しかし、華々しく紹介された新術式が5年後には消えていることはまれではなく、消えた原因が表に出ることはほとんどありません。つまり、新術式で生じたトラブルは闇に葬られ、都市伝説を信じた術者と患者は大きな肉体的あるいは精神的な負担を強いられることとなります。

一方、トラブル症例は、異物に対する生体の反応を語ってくれるという側面があります。つまり、客観的にトラブル症例を検証することによって新たな知見が得られ、トラブル症例は安全な治療法を確立することに寄与すると考えられま

す。

本講演では、インプラント関連手術におけるトラブル症例を供覧し、トラブルの原因と安全な手術について考察したいと思います。

履歴

- 1985年 大阪歯科大学 卒業
- 1989年 大阪歯科大学大学院（口腔外科学専攻）終了
- 1991年 日本生命済生会附属日生病院・歯科口腔外科医長
- 1995年 名古屋大学医学部口腔外科学講座・文部教官助手
- 1997年 大阪歯科大学口腔外科学第2講座・非常勤講師
- 1999年 神戸大学医学部・非常勤講師
- 2000年 神戸市立西市民病院・歯科口腔外科医長
- 2005年 野阪口腔外科クリニック・院長
- 2009年 医療法人社団野阪口腔外科クリニック・理事長
- 2014年 兵庫医科大学歯科口腔外科学講座・非常勤講師
- 2015年 大阪歯科大学インプラント学講座・非常勤講師
- 2023年 昭和大学歯学部インプラント歯科学講座・客員教授

本講演に関係する著書と論文

- 1) Nosaka Y: Sinus floor elevation Avoiding pitfalls using cone-beam CT, Quintessence, UK, 2014.
- 2) Nosaka Y, Nosaka H, Arai Y: Complications of postoperative swelling of the maxillary sinus membrane after sinus floor augmentation. J Oral Science & Rehabilitation, 2015;1(1): 26 – 33.
- 3) 野阪泰弘、米澤大地、十河基文、他：SAFE (Sharing All Failed Experiences) Troubleshooting Guide Volume 3 外科的合併症編 CTで検証するインプラント手術のトラブル. クインテッセンス出版株式会社. 東京, 2018.
- 4) 野阪泰弘：CTと動画が語る サイナスフロアエレベーションの真実. クインテッセンス出版株式会社. 東京, 2018.
- 5) Nosaka Y, Nosaka H, Nakajima Y, Tanioka T, Botticelli D, Baba S. A Reliable Surgical Procedure for Sinus Floor Augmentation with Antral Pseudocysts. Dentistry Journal. 2021; 9(10):122.
<https://doi.org/10.3390/dj9100122>
- 6) 野阪泰弘：上顎洞の口蓋陥凹は、サイナスリフト内側部の含気化に参与している？QDI. クインテッセンス出版株式会社. 東京, 2022; No.1, 80-92.
- 7) 野阪泰弘：インプラント体の初期固定を最重要視し、基本は「ラテラルアプローチ+待時埋入」 QDI. クインテッセンス出版株式会社. 東京, 2023;

No.4, 36-45.

- 8) Nosaka Y, Nosaka H, Munakata M, Sanda M. A Comprehensive Clinical Review of Maxillary Sinus Floor Elevation in Patients with Well-Defined Faintly Radiopaque Lesions in the Antrum. *Journal of Clinical Medicine*. 2024; 13(2):332. <https://doi.org/10.3390/jcm13020332>